

「三月十六日」

《概要》一日中舟行。瀟江を遡及するが、川幅が狭く急流である「瀧」を通過する。追い風で爽快な船旅で、周囲の風景も奇抜だったり美しかったりで、とてもいい気分分、思わず、旧句をくちずさんだりしている。

■本文の部

十六日

平明行、二十里、爲麻潭驛、其地猶屬零陵、而南即道州界矣。自入瀧來、山勢逼束、石灘懸互、而北風利甚、卷翠激玉、宛轉凌波、不覺其難、詠舊句「舡梭織峯翠、山軸捲溪綃」、〔《下寧洋溪中詩》〕。若爲此地設也。其處山鵲盛開、皆在水涯岸側、不作蔓山布谷之觀、而映碧流丹、尤覺有異。二十里、吳壘鋪、其西南山稍遜、舟反轉而東。又五里、復南轉、其東北岸有石、方形疊砌、圍互山腰、東下西起、若甃而成者、豈壘之遺者耶？又十里、山勢愈逼束、是爲瀧口。又五里、泊於將軍灘。灘有峯立瀧之口、若當關者然。溯流出瀧、劃然若另闢區宇。是夜月明達旦、入春來所未有。

■訳注の部

●訓訳

十六日

平明に行く。二十里にして、麻潭驛たり。其の地は猶ほ零陵に屬す、而して南は即ち道州の界なり。

瀧に入りてより來、山勢逼束し、石灘懸互す。而して北風利なること甚しく、翠を巻き玉を激し、宛轉たる凌波なれば、其の難を覺えず。舊句を詠ず「舡梭峯翠を織り、山軸溪綃を捲く」と「寧洋の溪中に下るの詩」。此の地の爲に設くるが若きなり。其の處は山鵲盛んに開く。皆な水の涯岸側に在りて、蔓山布谷の觀を作さず、而して映碧流丹にして、老も異有るを覺る。

二十里にして、吳壘鋪たり。其の西南の山は稍々遜なり。舟反轉して東す。又た五里にして、復た南轉す。其の東北の岸に石有り、方形疊砌、山腰を圍互す。東は下り西は起き、甃して成る者の若し。豈に之を壘するの遺せる者か。又た十里にして、山勢愈々逼束し。是れ瀧口たり。又た五里にして、將軍灘に泊す。

灘に峯の瀧の口に立つ有り、關に當る者の若く然り。流れを溯して瀧を出づれば、劃然として別に區宇を闢くものの若し。是の夜、月明旦に達す、春に入りてより來未だ有らざる所なり。

●語注

○山鵲 鵲は、杜鵑花。春に花を咲かせる有名な鑑賞植物。その自然生成版であろうか。

○疊砌 砌は、(積み重ねて) 築く。疊砌で、積み重ねて築く。

○甃 瓦を敷く。人造建築物のことか。

●口語訳

「十六日」

黎明に出発。二十里で、麻潭駅である。この地はまだ零陵県に所属している。しかしここから南は道州の境域である。

「道州域に入る」

瀧中に入ってから以来、山の勢が狭め迫るようであり、石の急流が連続して横たわる。しかし、北風がおおいに追い風となり、碧の急流は逆巻き、玉のような水玉を激しく散らす。錦のような波がうねうねと曲がる中、危険な難所であるという気持ちは全く無く、昔作った句をくちさむ「船が機織りの梭のように碧なす峯の間をめぐり、山が軸となつてうすぎぬのような溪流を巻き付けているかのようだ」「寧洋の溪中に下る」の詩である」。この句はまるでこの地のために作ったかのようなうた。このあたりは赤い山鵲（杜鵑花）が盛んに花開いている。しかしすべて、水辺の崖の岸側にあつて、山を覆い谷を埋め尽くすといった景観をなしているわけではない。しかし碧の水と紅の花とが映えあい、流れるようで、まことに常には異なる景観をなしていると感じられる。

二十里で、呉壘鋪である。西南の山はやや見劣りがする。舟は反転して東に向かう。さらに又た五里で、こんどは南に転じる。転じるあたりの東北の岸に石がある。方形の石が積み重ねて築いたようで、山の腰あたりを囲んでいる。東側は下り西側は上昇しており、人工的に積み重ねてできているもののようなうた。石壘の遺跡であろうか。さらに又た十里で、山の勢いが愈々迫ってくる。ここが瀧口である。さらに又た五里で、將軍灘で停泊する。灘の中で、瀧の口に峯がそり立っているものがある。関所を守っているかのようなうた。流れを遡って瀧を出れば、からりと別世界が開けたようだった。もの夜、月が明るく輝くことが明け方まで続いた。春に入ってからこのようなことはなかった。

「三月十七日」

《概要》舟行で、道州に至る。上陸し、道州城壁に登つてあたりの地形を確認する。

■本文の部

十七日

平明行。水徑迂曲。五里至青口。一水東自山峽中出者、寧遠道也。此水最大、即瀧水也。一水南自平曠中來者、道州道也。此水次之、即沱水也（「水小弱」。乃舍瀧而南溯沱。

又五里爲泥江口。按《志》有三江口、爲瀧・沱・營合處。問之舟人、皆不能知。豈即青口耶。但、營水之合在上流耳。「水西通營陽。舟上羅坪三日程。當即營水矣。」

又三十里、抵道州東門。繞城南、泊於南門。

下午入城。自南門入、過大寺「名報恩寺」、由州前抵西門。登南城廻眺、乃知道州城南臨江水、東南西三門俱南瀕於江、惟北門在內。蓋沱水自江華、掩・邀二水自永明、俱合於城西南十五里外、東北來、抵城西南隅、繞南門至東門、復東南去。若彎弓然、而城臨其背。西門有瀧溪水、西自月巖。翼雲橋跨其上。東門亦水自北來注。流更微矣。

迨暮、仍出南門、宿舟中。夜復雨。

道州附郭有四景。東有響石、「即五如石」、西有瀧溪、北有九井、南有一木「南門外一大木臥江底」。

■ 訳注の部

● 訓訳

十七日

平明に行く。水徑は迂曲す。五里にして青口に至る。一水の東のかた山峽の中より出づる者は、寧遠の道なり。此の水最も大にして、即ち瀟水なり。一水の南のかた平曠の中より來る者は、道州の道なり。此の水之に次ぎ、即ち沅水なり、水は小弱なり。乃ち瀟を舍てて南のかた沅を遡る。

又た五里にして泥江口たり。《志》を按ずるに、三江口有り、瀟・沅・營の合するの處たり、と。之を舟人に問ふに、皆知る能わず。豈に即ち青口か。但し、營水の合は上流に在るのみ。水は西のかた營陽に通ず。舟上にて羅坪へは三日の程なり。當に即ち營水たるべし。

又た三十里にして、道州の東門に抵る。城の南を繞りて、南門に泊す。

下午、城に入る。南門より入り、大寺「名は報恩寺」を過ぎ、州の前より西門に抵る。南城に登りて廻眺し、乃ち知る、道州、城南は江水に臨み、東南西の三門俱に南に江に瀕す、惟だ北門のみ内に在り。蓋し沅水は江華よりし、掩・邀二水は永明よりし、俱に城の西南十五里の外に合して、東北に來り、城の西南隅に抵りて、南門を繞りて東門に至り、復た東南に去る。彎弓の若く然りして、城は其の背に臨む。西門に濂溪水有り、西のかた月巖よりす。翼雲橋其の上を跨ぐ。東門も亦た水の北より來りて注ぐ。流れは更に微なり。暮に追ふ、仍りて南門を出で、舟中に宿す。夜復た雨ふる。

道州の附郭に四景有り。東に響石有り「即ち五如石なり」、西に濂溪有り、北に九井有り、南に一木有り「南門外に一大木江底に臥す」。

● 語注

○沅水 今の名は沱江。

○按《志》有三江口、爲瀟・沅・營合處 「大明一統志」卷六五永州山川に「瀟水」南流至三江口、東北與沅水合」「營水」東流與沅池水合」「沅水」經三江口、合瀟江」とある。

○東門 現代地図には、道江鎮の東端に「東門郷」が見える。

○報恩寺 「大明一統志」卷六五永州寺觀に「報恩寺」在道州治東」とある。

○附郭 熟語はないが、黃珣は「郊外」と解す。

○五如石 十八日条参照。

○濂溪 「大明一統志」卷六五永州山川に「濂溪」在道州西二十餘里。宋儒周敦頤所居」とある。

● 口語訳

「十七日」

黎明に出発する。水路は屈曲している。五里で青口に至る。東の山峽の中から流れてくる一筋の川がある、これは寧遠への道である。この川は最も幅が広い、つまり瀟水の本流である。また南の平地の中から流れてくる川もある。これは道州への道となる。この川の

幅は瀟江のものに次ぐ。これが沅水である。水勢いがやや弱い。そこで、瀟江を離れて、南へと沅水を遡ることとする。

さらに又た五里で泥江口である。「大明一統志」を見ると、三江口があり、瀟江と沅水と營水とが合流するところ、とある。このことを船頭に問うたが、誰も知らなかった。あるいは青口のことであろうか。ただし、營水が合流するのはもっと上流である。營水は、西の方で營陽に通じている。舟で羅坪までは三日の行程である。おそらく營水なのである。

さらに又た三十里で、道州城の東門に至る。城の南をめぐつて、南門に停泊する。

午後、道州城に入る。南門から入り、大寺「名は報恩寺である」を過ぎ、州の役所の前を通つて西門に至る。南城に登つて見渡し、そこで分かったことは、道州城は南側が瀟江に臨み、東南西の三門はすべて南側で瀟江に面している。ただ北門だけが、内陸部に開いている。思うに、沅水は江華から、掩水と邀水の二水は永明から流れてきて、ともに道州城の西南十五里とことで合流し、東北に流れてきて、道州城の西南隅に至つて、南門を回つて東門に至り、復た東南に流れ去る。川が引き弓のように曲がっていて、城は弓の背の部分に臨んでいる。西門のところに濂溪水がある。西の月巖より流れてくる。翼雲橋がこの川を跨いでいる。東門のところにも北から来て注ぐ川があるが、その流れは微かなものである。

暮になったので、南門を出て、舟に戻り、宿す。夜復た雨が降った。

道州近郊に四つの景勝がある。東に響石があり「つまり五如石である」、西に濂溪あり、北に九井あり、南に一木あり「南門の外に江の底に臥している大木がある」。

「三月十八日」

《概要》道州東の五如石などの名勝を探訪。州城に引き返し、州の西門を出て出発。松林の並木道を進み、華巖を探訪。さらに西へし、濂溪祠を探索。風水的な分析を行う。午後には月巖に達し、観察し、泊す。

■本文の部

天光瑩徹、早飯登涯。由南門外循城半里、過東門、又東半里有小橋、即淞泉入江處也。橋側江濱有石突立、〔狀如永州愚溪橋、透漏聳削過之、〕分岐空腹、其隙可分瓣而入、其竇可穿瓠而透、所謂五如石也。中有一石、擊之聲韻幽亮、是爲響石。按元次山《道州詩題》、石則有五如・窠樽、泉則有湊・漫等七名、皆在州東、而泉經一淞而可概其餘、石得五如而窠樽莫覓。屢詢、一儒生云…「在報恩大寺。」然元序云、在州東左湖中石山巔。石窠可樽、其上可亭、豈可移置寺中者、抑寺即昔之左湖耶？質之其人、曰…「入寺自知。」乃入東門、經南門內、西過報恩寺、欲入問窠樽石、見日色麗甚、姑留爲歸途探質。

亟出西門、南折過翼雲橋、有二岐。從西二十五里爲濂溪祠、又十里爲月巖；從南爲十里鋪、又六十里爲永明縣；十里鋪側有華巖、由巖下問道可出濂溪祠。余欲兼收之、遂從南行。大道兩傍俱分植喬松、如南嶽道中、而此更綿密。有松自下分柯五六枝、叢挺競秀、此中特見之、他所無也。自州至永明、松之夾道者七十里、栽者之功、亦不啻甘棠矣。州西南崗陀高下、置道因之。而四顧崇山開遠、惟西北一山最高而較近、則月巖後所倚之大山也。至十

里鋪東、從小徑北向半里、爲華巖。洞門向北、有小水自洞下出。由洞入、止聞水聲、而不見水。轉東三丈餘、復南下、則穹然深暗、不復辨光矣。時洞北有僧寮、行急不及入覓火炬、聞其內止一炬可盡、亦不必覓也。遂從寮右北向小徑行。此處山小而峭、或孤峙、或兩或三、連珠駢筍、皆石骨嶙峋、草木搖颺、升降宛轉、如在亂雲疊浪中、令人茫然、方向（莫）辨。然無大山表識、惟西北崇峯、時從山隙瞻其一面、以爲依歸焉。五里、橫過山蹊、四五里、渡一小石橋、又逾嶺、得大道西去。隨之二里、又北入小徑、沿石山之嘴、共四里而轉出平疇、則道州西來大道也、又一里而濂溪祠在焉。

祠北向、左爲龍山、右爲多山、皆後山、象形、從祠後小山分支而環突於前者也。其龍山即前轉嘴而出者、多山則月巖之道所由渡濂溪者也。祠環於山間而不臨水、其前擴然、可容萬馬、乃元公所生之地、今止一二後人守其間、而旁無人焉。無從索炊、乃西行。一里、過多山、沿其北、又一里、渡濂溪。「溪自月巖來、至此爲多山東障、乃北走、又東至州西入沅水。」從溪北溯流西行、五里而抵達村、爲洪氏聚族。乃臥而候飯、肆中無酒、轉沽久之、下午始行。遂西南入山。路傍先有一峯圓銳若標、從此而亂峯漸多、若卓錫、若駢指、若列屏、俱環映於大山之東、分行逐隊、牽引如蔓、皆石骨也。又五里、南轉入亂山之腋。又三里、西越一嶺、望見正西一山、若有白煙一脈抹橫其腰者、即月巖上層所透之空明也。蓋正西高山屏立、若齊天之不可階、東下第三層而得此山、中空上碧、下關重門、翠微中剋、光映前山、故遙睇若白雲不動。又二里、直抵〔月巖〕山下、從其東麓拾級而上、先入下巖。其巖東向、中空上連、高岩若橋、從下望之、若虎之張吻、目光牙狀、儼然可畏。復從巖上遍歷諸異境、是晚宿於月巖。

■ 訳注の部

● 訓訳

十八日

天光瑩徹なり。

早に飯して涯に登る。南門の外より城に循ふこと半里にして、東門を過ぐ。又た東に半里にして小橋有り、即ち涪泉の江に入るの處なり。

橋の側の江濱に、石の突出する有り。状は永州の愚溪橋の如し、透漏聳削すること之に過ぐ。分岐して腹を空にし、其の隙は瓣を分かちて入るべく、其の竇は瓠を穿ちて透すべし。所謂る、五如石なり。中に一石有り、之を撃つに聲韻幽亮たり。是れ響石たり。元次山の《道州詩題》を按ずるに、石は則ち五如・窠樽有り、泉は則ち漣・漫等七名有り。皆な州の東に在り。而して泉は一涪を経れば其の餘を概すべくして、石は五如を得るも窠樽は覓むる莫し。屢々詢ふに、一儒生云ふ「報恩大寺に在り」と。然れば元序に「云ふ、〔州の東の左湖中の石山の巔に在り。石窠樽とすべく、其の上は亭すべし〕」と。豈に移して寺中に置くべきものか、抑々寺は即ち昔は左湖にあるか。之を其の人に質すに、曰く「寺に入れば自ら知る」と。乃ち東門に入り、南門の内を経て、西して報恩寺を過ぎり、入りて窠樽石を問はんと欲す。日色の麗きこと甚しきを見る、姑く留りて歸途の採實を為す。

亟に西門を出で、南に折れて翼雲橋を過ぐ。二岐有り。西に従へば二十五里にして濂溪祠たり、又た十里にして月巖たり。南に従へば十里鋪たり、又た六十里にして永明縣たり。十里鋪の側に華巖有り、巖下の間道由りして濂溪祠に出づべし。余兼ねて之を收めんと欲し、遂に南に従ひて行く。

大道の兩傍に俱に喬松を分植すること、南嶽の道中の如し、而して此れ更に綿密なり。松の下より分柯すること五六枝なる有り、叢挺して秀を競ふ。此の中にて特り之を見るにして、他所には無きなり。州より永明に至るに、松の道を夾むこと七十里なり、栽する者の功は、亦た啻だに甘棠のみならざるなり。

州の西南は崗陀高下し、道を置くこと之に因る。而して四顧するに崇山開遠にして、惟だ西北の一山のみ最も高くして較々近し。則ち月巖の後ろの倚る所の大山なり。

十里鋪の東に至り、小徑よりして北に向ふこと半里にして、華巖たり。洞門は北に向かひ、小水の洞より下り出づる有り。洞より入るに、止だ水聲を聞くのみにして、水を見ず。轉じて東に三丈餘にして、復た南に下れば、則ち穹然として深暗なり、復た光を辨ぜず。時に洞北に僧寮有り、行くこと急なるも、入るに火炬を覓むるに及ばず、聞く其の内は止だ一炬にして盡くすべく、亦た必らずしも覓めざるなり。

遂に寮の右より北に向ひて小徑を行く。此の處の山は小にして峭なり、或ひは孤峙し、或ひは兩、或ひは三、連珠駢筍のごとし。皆白骨嶙峋として、草木搖颺して、升降宛轉し、亂雲疊浪の中に在るが如く、人をして茫然として、方向辨ずる莫からしむ。然して大山の表識たる無く、惟だ西北の崇峯のみ、時に山隙より其の一面を瞻せ、以て依歸と為す。

五里、山蹊を横過す。四五里にして、一小石橋を渡る。又た嶺を逾え、大道の西に去るを得。之に隨ふこと二里にして、又た北して小徑に入り、石山の嘴に沿ひて、共に四里にして轉じて平疇に出づ。則ち道州より西來せる大道なり。又た一里にして濂溪祠焉に在り。祠は北に向き、左は龍山たり、右は多山たり。皆後山にして、形に象る。祠後の小山より分支して環して前に突する者なり。其の龍山は即ち前に嘴より轉じて出づる者にして、多山は則ち月巖の道の由りて濂溪を渡る所の者なり。祠は山間に環されて水に臨まず、其の前は擴然として、萬馬を容るべし。乃ち元公生まるる所の地なり。今は止だ一二の後人其の間を守るにして、旁に人無し。よりて炊を索むる無く、乃ち西に行く。

一里にして、多山を過ぐ。其の北に沿ひて、又た一里にして、濂溪を渡る。溪は月巖より來りて、此に至りて多山の東障となり、乃ち北に走りて、又た東して州の西に至りて沅水に入る。溪の北より流れを溯して西に行き、五里にして達村に抵る。洪氏の聚族なり。乃ち臥して飯を候つ。肆中に酒無く、轉沽之を久しくし、下午に始めて行く。

遂に西南して山に入る。路傍に先ず一峯の圓銳にして標の若き有り、此より亂峯漸く多し。卓錫の若く、駢指の若く、列屏の若く、俱に大山の東に環映して、分行逐隊して、牽引する蔓の如きも、皆な石骨なり。又た五里にして、南に轉じて亂山の腋に入る。又た三里にして、西に一嶺を越え、正西に一山の、白煙一脈其の腰に抹横せる有るが若き者あり。即ち月巖上層の透する所の空明なり。蓋し正西は高山屏立し、天に齊しくして階すべからざるが若し。東下の第三層にして此の山を得、中は空にして上は砦に、下に重門を闢き、翠微中を剗り、光は前山に映ず。故に遙に睇むるに白雲の動かざるが如し。又た二里にして、直ちに月巖の山下に抵る。其の東麓より級を拾ひて上り、先ず下巖に入る。其の巖は東向きにして、中は空にして上に連なり、高砦せること橋の若し。下より之を望めば、虎の吻を張りて、目の光り牙の状の若くにして、儼然として畏るべし。復た巖上より遍く諸異境を歴す。

是の晚、月巖に宿す。

●語注

○五如石 「大明一統志」卷六五永州山川に「五如石」在道州城東。唐元結序、淦泉之陽、得怪石焉。左右前後、及登石顛、皆相似。故名之曰五如石」とある。

○按元次山《道州詩題》 元結に「五如石銘並序」「竊樽銘並序」「七泉銘並序」がある（『全唐文』）。これらをまとめて「道州詩題」としているのか。以下全文を掲げておく。

＊元結『五如石銘序』「淦泉之陽、得怪石焉。左右前後、及登石顛、均有如似、故命之曰五如石。石皆有竇、竇中湧泉、泉詭異於七泉、故命為七勝泉。石有雙目、一目命為洞井。井與泉通、一目命為洞樽。樽可へ貝居酒、石尾有穴、有如礪者。又如礪者、泉可渟澄、匣石而流、入礪中、出而為瀧。於戲！彼能異於此、安可不稱顯之」

＊元結『竊樽銘序』「道州城東有左湖、湖東二十步有小石山。山顛有竊石、可以為樽、乃為亭樽上、刻石為誌。」

＊元結『七泉銘序』「道州東郭、有泉七穴。或吐於淵竇、或繁於嵌臼、皆澄清清漪、旋沿相奏。又有藂石欹缺、為之島嶼、殊怪相異、不可名狀。此邦豈世無好事者邪、而令自古荒之。乃修其水木、為休暇之處。每至泉上、便思老焉。於戲。凡人心若清惠、而必忠孝守方直、終不惑也。故命五泉、其一曰漣泉、次曰湍泉、次曰淦泉、次曰淦泉、次曰淦泉、次曰淦泉、次曰淦泉、次曰淦泉。銘之泉上、欲來者飲漱其流、而有所感發者矣。留一泉名曰漫泉、蓋欲自旌漫浪、不厭歡醉者也。一泉出山東、故命之曰東泉、引來垂流、更復殊異。各刻銘以記之。」

○然元序云 元結「竊樽銘序」に「道州城東有左湖、湖東二十步有小石山。山顛有竊石、可以為樽」とある。

○窠 くぼみ。

○可樽 酒樽とすることができる。

○濂溪祠 濂溪書院。

○永明縣 いまの江永県。

○叢挺 群がると拔きん出る。相容れない語のようだが、競秀と同じく、複数のものが集まりつつそこから拔きん出ようとしている、ということか。

○元公 周敦頤（一〇一七～七三）。字は茂叔、号が濂溪。宋学の祖の一人。「太極図説」「通書」を著す。諡が元公。

○達村 「桂林」図、小地図1に見える。

○轉沽 転は、あちこちでいろいろする。沽は、買う。

○標 標槍。作戦立案中に攻撃の象徴として標槍を用い、防御の象徴として榜盾を用いた。武器の一種だが、目印となりやすいものだったのだろう。

○翠微 もやのたちこめた青々とした山。また、薄緑色のもや。もやがたちこめたような薄緑色の山の姿が、月巖の中空の穴を透かして見えているさまか。

○月巖 「地名湖南」名勝に「月岩、又名太極岩、俗名穿岩。」とある。「大明一統志」卷六五永州府山川に「（穿巖）在道州西四十里。形如圓廩（くら）。中可容數萬斛。東西兩門通道其間。望之若城門、又如偃月（弓張り月）。巖前有石、如走貌伏犀、其狀不一」とある。

●口語訳

「十八日」

日の光がっややかである。

早朝に朝食を摂り、涯に上がる。南門の外から城壁に沿って半里進み、東門を通り過ぎる。さらに又た東に半里で小さな橋がある。ここが涪泉が沔水の合流する場所である。

橋の側の川沿いに、突出する石がある。そのさまは、永州の愚溪橋と同じだ。しかし透漏聳削することにおいて愚溪橋より勝っている。先が枝分かれをしており、真ん中は空間があり、花卉をかき分けるようにして石の割れ目に入り、瓢箪をくりぬいたような穴をくぐって入る。これこそ、いわゆる「五如石」である。その中にまた石がひとつあり、これをたたくと深く明らかな響きがする。これが「響石」である。元結の「道州詩題」を見ると、石は五如石と窠樽石、泉は漣泉や漫泉などの七つの名があり、皆、道州の東に位置している、とある。そして泉は涪泉ひとつを見れば、他の六つを概括できようが、石は五如石は見ることできたが、窠樽石は探し求められないでいる。そこでその所在について色々聞いてみると、ひとりの儒生が「報恩大寺にある」と言う。そうであれば、元結の序文には「州の東の左湖の中の石山の巔にある。石の窪みは酒樽代わりとなり、その上に亭子をもうけている」とある。(石のある場所について食い違っている)。この石を移動させて寺の中に置いたのだろうか、あるいは寺はもとは左湖にあったのだろうか。この点をその人に聞いただと、「寺に行けば自ずと分かります」と言う。そこで東門に入り、南門の内を経て、西へ報恩寺を訪問し、そこで窠樽石を尋ねようかと考えた。しかし、日の光が甚だ美しいのを見て、窠樽石の探訪は、いまはパスして、復路で行うこととした。速やかに西門を出て、南に折れて翼雲橋を過ぎる。二股道である。西の道は二十五里で濂溪祠に至り、さらに又た十里で月巖に至る。南の道は十里鋪に至り、さらに又た六十里で永明縣に至る。十里鋪の側に華巖があり、巖下の間道から濂溪祠に出でられるようだ。私はどちらも尋ねたかったので、南の道を選択した。

大道の両側に高い松の木が植えられており、南嶽の道中と同じである。しかし、ここの方が植栽は綿密である。根元から五六枝が分岐している松があり、群がり生えて競うようにして高く伸びている。この地でのみ見られるもので、他の場所では目にすることができないものだ。道州から永明縣へ至るまで、松林が道を夾んで七十里あまりも続いている。植栽を施してくれた人々の功績としては、周の召公が木陰で休んだという「甘棠」にも匹敵するものといえよう。

道州の西南部は岡や坂道が上下しており、道は地形に沿って設けられている。四方を見渡すと高い山が遙か遠くに見えるが、ただ西北の一山のみ最も高くしてやや近くに位置する。これは月巖の後ろに連なっている大山である。

十里鋪の東に至り、小径を北に半里進むと、華巖である。洞門は北向きで、洞口から小さな泉が流れ出ている。洞に入ってみると、水音は聞こえるのだが、水の流れは見えない。東に向きをかえ、三丈ほどで、復た南に下ると、ドームを形成していて真つ暗となり、光が全く見えない。時に洞の北に僧寮がある。急いでそこへ行くが、洞に入るのに火炬を求める必要はないらしい。聞くとところによると、洞の内は一本の炬が有れば見尽くせる程度であり、松明を求めるまでもない、とのことだった。

かくして僧寮の右側から北に向って小径を行く。このあたりの山は、高くはないが険しく、あるものは一つで聳え、あるものは二座あるいは三座で、連ねた真珠や並びたつ筍のようである。どれも骨のように白く固い石が聳え立ち、風に吹かれた草木が、ゆらゆらと

上下にただよっている。紛乱とした雲や浪の中を行くようで、茫然としていて、進むべき方向が分からないほどである。目印になるような大きな山もなく、ただ西北に聳える崇い峯だけが、時折、山の隙間からその一面を見せてくれて、進む方向を知るよりどころとなっている。

五里進み、山間の小径を横断する。四五里して、一小石橋を渡る。さらに又た山嶺を越え、西に伸びる大道に出た。この大道を二里進み、さらに又た北へ転じて小徑に入る。石山の出口のあたりに沿って、あわせて四里で、転じて平坦な田地に出る。ここが道州から西へ伸びてきた大道である。さらに又た一里で、濂溪祠である。

濂溪祠は北向きで、その左には龍山が、右には多山がある。どちらも後山で、山の形に象った命名である。祠の後ろの小山から枝分かれして、祠をぐるっと回って前で山として突起している。龍山は即ち山の口から前に転じて出ているものであり、多山は月巖への道で濂溪を渡るところにあるものである。祠は山に囲まれていて水面には臨んでいない。祠の前は広々としていて、一万頭の軍馬を収容できるほどである。こここそ元公が生まれた地である。今はただ後学のものが一二名、祠を守っているだけで、その旁らには人家もない。食事を求める手立ても無く、そのまま西に進む。

一里で、多山を過ぎる。山の北に沿って、さらに又た一里で、濂溪を渡る。溪は月巖から流れてきて、ここで多山の東障に突き当たり、北に向きを変え、さらに又た東に流れて道州城の西に至って沱水に合流する。溪流の北から、流れを遡って西に行き、五里で達村に至る。ここは洪氏一族の村である。そこで体を横たえて食事の支度を待つ。お店にはお酒が無かったので、あちらこちらと買いにゆくことに時間を費やし、午後になってようやく出発する。

かくして西南に向かい山に入る。路傍に先ずはじめに、標槍のような円錐形の尖った峯が見える。ここから乱雑な山峯が次第に多くなっていく。突き立てた錐のようなもの、なべた指のようなもの、屏風を並べたようなものなど、いずれも大きな山の東側をめぐっており、あるいは分かれ、あるいは落ちこみ、鳶が引っ張っているようなものもあるが、いずれにしても石である。さらに又た五里で、南に転じ、入り乱れる山々の腋に入る。さらに又た三里で、西に一山嶺を越えると、真西、一筋の白煙を腰にまとったような山が見えた。こここそ、月巖の上層部の光が透かしているところである。思うに、真西は高い山が並び立っており、天と同じ高さであって、登ることのできる階段はないようである。この山の東に下った第三層に至ると、中は空間で上は弓形をなし、下には重なる門を開き、薄緑色の山の姿が穴の中をえぐるようにして見えてきて、光が前の山に映っている。だから遙にながめると、動かない白雲のように見える。

さらに又た二里で、真つ直ぐ月巖の山下に至る。東麓から石段を上り、先ず下巖に入る。その巖は東向きで、中は空で上に連なり、高く聳えることが橋のよう。下から仰ぎながめると、虎が口を大きく開け、目をらんと光らせて牙をむいたようである、まことに恐ろしげである。また巖の上にあがり、諸々の異境を経巡る。

この晩は、月巖に宿した。

「三月十九日」

《概要》月巖を出て、東南に下る。山に入ったり出たりを繰り返し、板寮というところへ至り、泊す。

■本文の部

十九日

自月巖行二里、仍過〔所〕望巖如白煙處。分岐東南行、穿小石山之腋、宛轉群隊中。八里出山、渡大溪而東、是爲洪家宅、亦洪氏之聚族也。又東南入小土山、南向山脊行、三里而下、一里出山、有巨平巖橫右而東。一里、復南向行山坡、又二里、南上一嶺〔名銀鷄嶺〕。越嶺而下、有村兩三家。從其東又三里爲武田、「自月巖至武田二十里。」其中聚落頗盛。再東半里、即永明之大道也。橫大道而過、南沿一小平溪行一里、渡橋而東又半里、則大溪湯湯介於前矣。是爲永明掩・邀二水、是爲六渡。渡江復東南行、陂陀高下、三里爲小暑洞。又東逾山崗、三里得板路甚大、乃南隨板路、又十里而止於板寮、蓋在上都之東北矣、問所謂楊子宅・南龍、俱過矣。

■訳注の部

●訓訳

十九日

月巖より行くこと二里にして、仍りて望む所の巖の白煙の如き處を過ぐ。分岐し東南に行く。小石山の腋を穿ち、群隊の中を宛轉す。八里にして山を出で、大溪を渡りて東す。是れ洪家の宅たり、亦た洪氏の聚族なり。又た東南に小土山に入る、南して山脊に向かひて行く。三里にして下り、一里にして山を出づ。巨平巖の横右して東する有り。一里にして、復た南して山坡に向かひて行く。又た二里にして、南のかた一嶺〔名は銀鷄嶺なり〕を上る。嶺を越えて下るに、村兩三家有り。其の東よりして又た三里にして武田たり〔月巖より武田に至るは二十里なり〕。其の中の聚落頗る盛なり。再び東すること半里にして、即ち永明の大道なり。大道を横ざりて過ぎ、南へ一小平溪に沿ひて行くこと一里、橋を渡りて東すること又た半里なれば、則ち大溪湯湯として前に介す。是れ永明の掩・邀二水たりて、是れを六渡となす。江を渡りて復た東南に行く。陂陀高下すること、三里にして小暑洞たり。又た東に山崗を逾え、三里にして板路の甚だ大なるを得。乃ち南に板路に随ひ、又た十里にして板寮に止まる。蓋し上都の東北に在り。所謂る楊子宅・南龍を問ふに、俱に過ぎたり。

●語注

○隊 隧道。谷間の険しい道。

○洪家宅 「桂林」図、現代地図に見える。

○武田 大地図・小地図12に「午田」が見える。

○板路 板敷きの道路か。

●口語訳

「十九日」

月巖から二里で、前日遠望した、白煙をまとったような巖の腰を通り過ぎる。道が枝分かれしており、東南の道を取る。小さな石山の腋を通り、険しい小径をぐるぐると回るようにして進む。八里で山を出、大溪を渡って東に進む。ここに洪家の宅がある。これもまた洪氏一族の村である。さらに又た東南へ、小さな土山に入る。南へ山の尾根に向かって行く。三里で下りとなり、さらに一里で山を出た。巨大な平らな巖が東へ向かって横たわっている。一里で、再び南へ転じ、坂道に向かって行く。さらに又た二里で、南へ山嶺「名は銀鷄嶺である」を上る。山嶺を越えて下ると、二三軒からなる村落がある。その東からまた三里にて武田である「月巖から武田までは二十里である」。ここの聚落はとても賑わっている。さらに東へ半里行くと、永明県へ至る大道に出る。大道を横ぎりて、南へ小さな平溪に沿って一里行く。橋を渡って東へまた半里で、大溪が湯湯と流れて前を区切っている。これが永明県の掩水と邀水に二河川である。ここを六渡という。江を渡って復た東南に行く。道が高下しており、三里で小暑洞である。さらに又た東へ山崗を逾え、三里で、甚だ大きな板路に出る。そこで板路沿いに南に進み、さらに又た十里で板寮に至る。思うにここは上都の東北に位置している。所謂「楊子宅」「南龍」を尋ねると、どちらも既に通り過ぎていた。

「三月二十日」

《概要》板寮を出て、比較的大きな道を江華県城へ向かう。道中、村人から購入した筍を煮てもらい、おいしくいただいたという記事がある。食事についての記述はまれである。江華城に至り、西の浪石寺を訪ねる。「一刀屠」の肉身があるが、それについての記述は「自注」としている。いわゆる荒唐無稽な話なので「自注」扱いとしたのか。最後に浪石寺の山僧が「甚粗野」だとしているが、いったいどういう仕打ちをうけたのだろうか。

■本文の部

二十日

從寮中東南小徑、一里、出江華大道、遂南遵大道行、已爲火燒鋪矣。鋪在道州南三十裡而遙、江華北四十里而近。又行五里爲營上、則江華・道州之中、而設營兵以守者也。其後有小尖峯倚之。東數里外有高峯突岬、爲楊柳塘、由此遂屏互而南、九疑當在其東矣。西南數里外、有高峯圓聳、爲斜溜。其南又起一峯、爲大佛嶺、則石浪以後雲山也。自營上而南、兩旁多小峯巒岬。又五里、爲高橋鋪。又三里、有溪自西而東、石骨嶙峋、橫臥澗中、濟流漱之、宛然包園石壑也。溪上有石梁跨之、當即所謂高橋矣。又南七里、爲水塘鋪。自高橋來、途中村婦多覓筍箐中、余以一錢買一束、攜至水塘村家煮之、與顧奴各啜二碗、鮮味殊勝、以筒藏其半而去。水塘之西、直逼斜溜、又南、斜溜・大佛嶺之間、有小峯東起、若紗帽然。又五里爲加佑鋪、則去江華十里矣。由鋪南直下、從徑可通浪石寺。轉而東南從嶺上行、共六七里而抵江華城西。蓋自高橋鋪南、名三十里、而實二十五里也。循城下抵南門、飯於肆。又東南一里、爲麻拐巖。「一名迴龍庵。」

由迴龍菴沿江岸南行半里、水分二道來…一自山谷中出者、其水較大、乃沍水也；一自南

來者、亦通小舟、發源自上武堡。蓋西界則大佛嶺・班田・囂雲諸山迤邐而南去、東界則東嶺・苦馬雲諸峯環轉而南接、獨西南一塢遙開、即所謂上武堡也、其西南即爲廣西富川・賀縣界。「大小二江合於麻拐巖之南。大江東源錦田所、溯流二百餘里、舟行三・四日可至；小江南自上武堡、舟溯流僅到白馬營、可五十里。然入江之口、即積石爲方堰、置中流、橫遏江舟、不得上下、堰內另置小舟、外有橋、橫板以渡。白馬營東大山曰吳望山、有秦洞甚奇、惜未至；又南始至上武堡、堡東大山曰冬冷山。二山之水合出白馬營、爲小江上流云。乃」沿南小江岸又西行三里、是爲浪石寺。小江中石浪如湧、此寺之所由得名也。寺有蔣姓者成道、今肉身猶在、即所稱「一刀屠」也。「浪石有「一刀屠」肉身、其面肉如生。碑言姓蔣、即寺西村人。宋初、本屠者、賣肉輕重、俱一刀而就、不爽鎰銖、既而棄妻學道、入大佛嶺洞中、坐玉柱下。久之、其母入洞、尋得拜之、遂出洞、坐化于寺。後有盜、欲劫江華庫、過寺、以占取決、不吉。盜劫庫還、遂剖其腹、取心臟而去。此亦「一刀屠」之報也。其身已髡、而面尚肉、頭戴香巾、身襲紅褶爲儒者服、以子孫有青其衿者耳。」是日止於浪石寺、但其山僧甚粗野。

■ 訳注の部

● 訓訳

二十日

寮中の東南の小徑に従ひ、一里にして、江華大道に出づ。遂に南へ大道に遵ひて行く。已に火焼鋪たり。鋪は道州の南三十里にして遙か、江華の北四十里にして近きに在り。又た行くこと五里にして營上たり。則ち江華・道州の中なりて、兵を設營して以て守る者なり。其の後ろに小尖峯の之に倚る有り。東の數里の外に高峯の突岬せる有り、楊柳塘たり。此より遂に屏互として南す。九疑は當に其の東に在るべし。西南の數里の外に、高峯の圓聳せる有り、斜溜たり。其の南に又た一峯を起こす、大佛嶺たり。則ち石浪以後の雲山なり。營上より南す、兩旁に小峯の巒岨たる多し。又た五里にして、高橋鋪たり。又た三里にして、溪の西よりして東する有り。石骨嶙峋として、澗中に横臥し、濟流之に漱ぎ、宛然として包圍の石壑なり。溪の上に石梁の之を跨ぐ有り。當に即ち所謂の高橋なるべし。又た南に七里にして、水塘鋪たり。高橋より來、途中の村婦多く筭を箒中に覓む。余一錢を以て一束を買ひ、攜して水塘村の家に至り之を煮しむ。顧奴と各々二碗を啜る。鮮味殊に勝れり。以て其の半ばを筒藏して去る。水塘の西は、直ちに斜溜に逼る。又た南し、斜溜・大佛嶺の間、小峯の東に起る有り、紗帽の若く然り。又た五里にして加佑鋪たり。則ち江華を去ること十里なり。鋪より南に直下すれば、徑により浪石寺に通ずべし。轉じて東南に嶺の上によりて行く。共に六七里にして江華城の西に抵る。蓋ち高橋鋪より南は、名は三十里なるに、實は二十五里なり。城下に循ひて南門に抵り、肆に飯す。又た東南に一里にして、麻拐巖たり「一名迴龍庵なり」。

迴龍菴より江岸に沿ひて南に行くこと半里にして、水分れて二道より來る。一は山谷中より出づる者にして、其の水は較々大なり、乃ち沱水なり。一は南より來る者にして、亦た小舟を通ず、源は上武堡より發す。蓋し西界は則ち大佛嶺・班田・囂雲の諸山迤邐として南に去り、東界は則ち東嶺・苦馬・雲の諸峯環轉として南に接す。獨り西南は一塢遙に開く、即ち所謂の上武堡なり。其の西南は即ち廣西の富川・賀縣の界たり。大小二江麻拐巖の南に合う。大江は東のかた錦田所を源とし、流れを溯ること二百餘里、舟行にて三四

日にして至るべし。小江は南のかた上武堡よりし、舟にて流れを溯りて僅にして白馬營に到ること、五十里なるべし。然れども入江の口は、即ち石を積みて方堰を為し、中流に置き、横に江舟を遏^{さへど}り、上下するを得ず。堰内に另に小舟を置き、外に橋有りて、板を横して以て渡る。白馬營の東の大山を呉望山と曰ふ、秦洞の甚だ奇なる有り、惜しむらくは未だ至らず。又た南のかた始めて上武堡に至る。堡の東の大山を冬冷山と曰ふ。二山の水合して白馬營に出で、小江の上流と為すと云ふ。乃ち南の小江の岸に沿ひて又た西に行くこと三里にして、是れ浪石寺たり。小江中に石浪湧くが如し。此れ寺のよりて名を得る所なり。寺に蔣姓なる者の成道する有り、今肉身猶ほ在り、即ち稱する所の「一刀屠」なり。「浪石に「一刀屠」肉身有り、其の面の肉生くるが如し。碑に言ふ、姓蔣なるものは、即ち寺の西の村人なり。宋の初め、本と屠者にして、肉の輕重を賣る。俱に一刀にして就き、錙銖を爽はず。既にして妻を棄てて道を學び、大佛嶺の洞中に入り、玉柱の下に座す。之を久しくして、其の母洞に入り、尋ねて之を拝するを得。遂に洞を出で、寺に坐化す。後に盜有り、江華の庫を劫せんと欲し、寺を過ぎり、占を以て決を取るに、不吉なり。盜庫を劫して還り、遂に其の腹を剖き、心臓を取りて去る。此れ亦た「一刀屠」の報ひなり。其の身已に髹し、而して面は尚ほ肉にして、頭には香巾を戴き、身には紅褶を襲ひて儒者の服を為す、子孫に其の衿を青くする者有るを以てなるのみ。」

是の日浪石寺に止まる。但だ其の山僧甚だ粗野なり。

●語注

○火燒鋪 「地名湖南」に「祥林鋪」原以火災頻仍、得名火燒鋪。後更名祥林鋪」とある。祥林鋪は、現代地図に見える。

○石浪 黄琬は「浪石」の誤りではないか、という。

○雲山 雲がかかっている高く遠い山。

○紗帽 大地図・小地図1に「紗帽山」が見える。

○加佑鋪 「路線図」は、今の橋頭鋪をここにあててゐるが、北すぎる。おそらく前述の水塘鋪が今の橋頭鋪で、加佑鋪は今の茅坪鋪ではないか。

○錙銖 さわめて小さい分量のたとえ。

○坐化 座したまま入滅すること。

○髹 漆を塗る。

○青衿 学者、読書人の服装を象徴する。

●口語訳

〔二十日〕

板寮から東南に出る小徑を一里進むと、江華大道に出る。そこで大道を南に行く。すぐに火燒鋪である。鋪は道州の南三十里と少し、江華の北四十里よりやや近くに位置する。さらに又た五里行くと營上である。ここは江華と道州の中間地点であり、軍隊を配置して守衛している。營上の後ろに小さな尖った峯が寄りかかっている。東に數里のところに突起して聳える高い峯がある、楊柳塘である。ここから南へ屏風のように山が連なっている。九疑山はこの山並みの東に位置しているのであろう。西南に數里のところには、円錐形の高く聳える峯がある、斜溜である。其の南にもまた一峯が聳える、大佛嶺である。ここは

石浪以後にはじめて出会った雲のかかる高い山である。

「江華県域に入る」

營上より南に進むに、道の両側には尖って聳える小さな峯がたくさんある。さらに又た五里で、高橋鋪である。さらに又た三里で、西から東に流れる溪流がある。山石がごつごつと飛び出して、澗の中に横臥し、川の流れがそれに注ぎ、あたかも太湖の包山のようにだった。溪流れの上を石梁が跨いでいる。これこそ高橋なのであろう。さらに又た南に七里で、水塘鋪である。高橋より以来、道ばたでは村の女性達が竹藪で筍を掘っていた。そこで一銭を出して一束を買い、水塘村の民家に持って行き、煮てもらう。顧奴とそれぞれ二碗づついただく。新鮮で美味なること素晴らしかった。そこで残りは竹筒に詰めてもらい、帯同することとした。水塘鋪の西は、すぐに斜溜に迫る。そこでさらに又た南すると、斜溜と大佛嶺との間に、東に起る小さな峯がある。まるで紗帽のようであった。さらに又た五里で加佑鋪である。ここは江華県城から十里の距離である。鋪から南に直下する、浪石寺に通じる小径がある。(しかし、その道は選ばず) 転じて山嶺の上の尾根道を東南に行く。あわせて六七里で、江華城の西に至った。思うに、高橋鋪より南は、三十里と称しているが、実際は二十五里であった。城壁に沿って南門に至り、店舗で昼食を取る。さらに又た東南に一里で、麻拐巖である「一名迴龍庵である」。

廻龍菴から川岸に沿って南に半里行くと、二筋の川が流れてきた。ひとつは山谷の中から出ているもので、川幅はやや大きい、これが沔水である。もうひとつは南から流れてくるもので、それでも小舟は通行できる。川源は上武堡より発している。

思うに、江華の西部は、大佛嶺・班田・鸞雲といった諸山がうねうねとして南に伸びており、江華の東部は、東嶺・苦馬・雲といった諸峯がぐるりとめぐって南に接している。ただ西南方面だけは、山塢が遙か遠くまで開けている。ここがいわゆる上武堡である。そのさらに西南は、広西省の富川県賀県の境域である。

大小の二江が麻拐巖の南で合流している。大江は東の錦田所を源としており、そこへは流れを溯ること二百餘里、舟行で三四日で至ることができる。小江は南の上武堡から来ており、舟行で流れを溯れば、五十里で白馬營に到る。然し、入り江の口は、石を積んで方堰を作っており、それが中流に置かれて、通る船を遮って、川を上下することができない。堰の内側に別に小舟があり、その外に橋が架かっており、横板を踏んで渡る。

白馬營の東の大山を呉望山と言う。甚だ奇なる秦洞があるというが、残念ながら行く余裕がない。

そこで南に上り上武堡に至る。堡の東の大山を冬冷山という。二山を淵源とする川が合流して白馬營に出て、小江の上流となつていと言われる。そこで南側の小江の岸に沿って西に三里行くと、浪石寺である。小江の中で石に当たる波音が湧き出しているかのようである。これが寺の名の所以である。寺に蔣という姓の者の即身成仏がある。いまでもその肉身が存在している。つまり称されるところの「一刀屠」である「浪石寺に「一刀屠」の肉身がある。その顔の肉はまるで生きているかのようだ。碑文によれば、姓蔣なるものは、寺の西の村人であった。宋の初め、屠殺をなりわいとしていて、肉を切って軽重さまざまを売っていた。いつも一刀で肉を切り、その分量はわずかも違うことはなかった。やがて妻子を捨てて仏道を学び、大佛嶺の洞中に入って、玉柱の下で座した。しばらくして、彼の母が洞に入り、尋ねあてて彼を礼拝することができた。そこで洞を出て、寺に入って坐化した。後に盜賊が、江華県の倉庫を強奪しようと思ひ、浪石寺

を訪ねて、占をしたところ、不吉とでた。しかし盗賊は倉庫を強奪して還り、遂に姓蔣の腹を剖いて、心臓を奪って去った。これもまた「一刀屠」の報いである。その身には漆が塗られているが、顔だけは肉のまま、頭には香巾を戴き、身には紅褶を着て儒者の服装をしている。子孫で読書人となったものがあるからであらう」。

この日は浪石寺に宿泊する。但だこの寺の僧侶はたいそう粗野である。